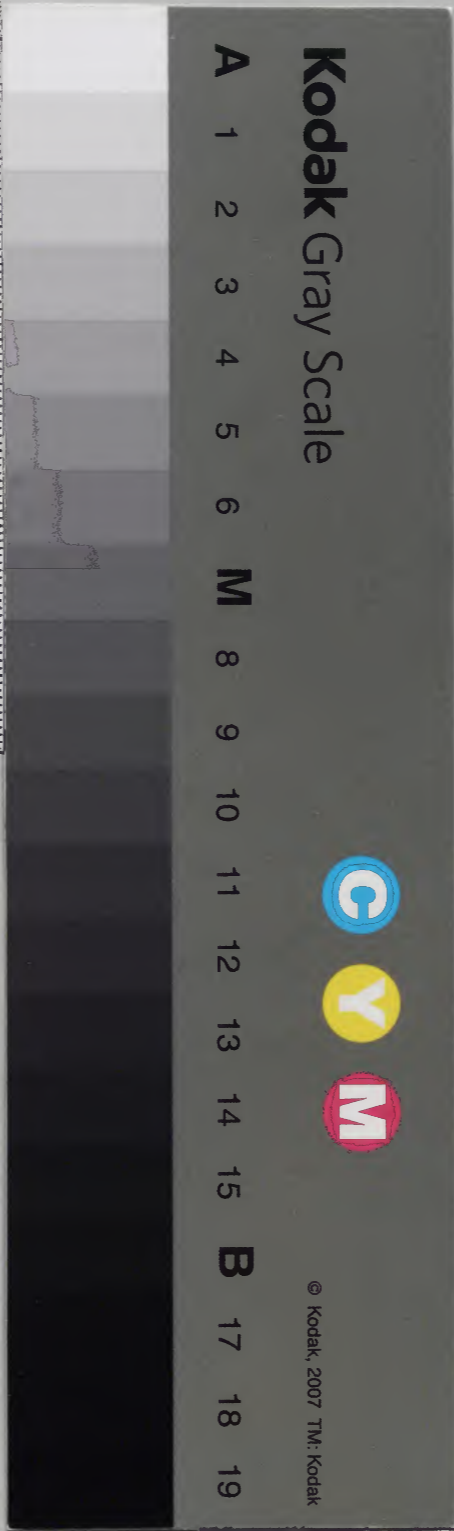


武德編年集成

自七拾
至七拾二

| | |
|------|---------|
| 內閣文庫 | |
| 番號 | 和 8641 |
| 冊數 | 31 (24) |
| 函號 | 150 3 |

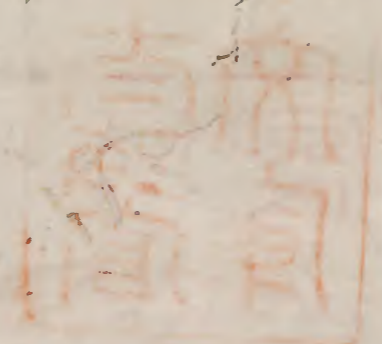
| | |
|--------|-------------|
| 庫文閣內 | |
| 五 函 | 八 冊 |
| 二 架 | 一 冊 |
| | 和 書 類 |





東京大学
図書

東京大学
図書



武德編年集成卷七拾

慶長十九甲寅年

十一月六

在津久高根の城を奪へ水原ふりあり

今朝 神君へ中井大和云上りるを正護院門

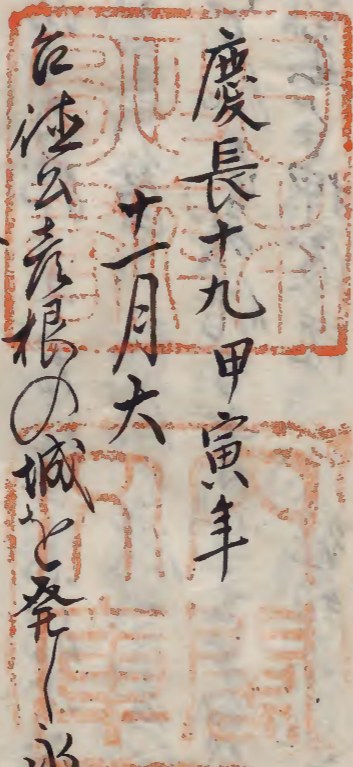
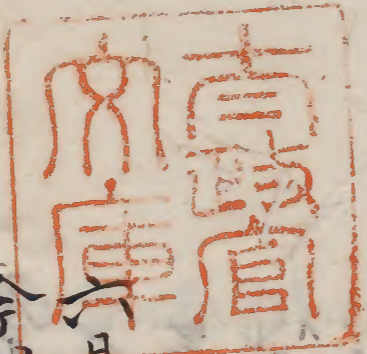
主奥意旦園城寺の僧侶赤杉の客首とて

神君の呪詛しきる類三井の中覚坊所と云云

則板倉橋を可紀り由余りて揚州神楽小於

と池田忠徳水練を以て遊踏とて也今黎明

舟を川場小篠詣りて護馬を河本より先



のハを

とてこれに在りて軍師由前場ハ謂ふ及至志徳
合使より傳申たぬの戸川地度と達安権掛
の花房志摩守正女多杉の死命助ハ職職之
子守りたす職則ハ忽川中系入て七千余の惣軍
一掃も不流押渡家を見入川向小坂一太坂方
の藪云周章して逃去処を追討して首級多く
是をとりて統へ右徳ハ小坂小和国小陣野里を
歴て南中の島小坂んと欲守多に於て武蔵守
利隆と姪表良作と青馬玄蕃氏神崎川の先
陣より進く押渡既に志徳制令と青馬一隊先登
すも無事進 神者の 台陣不及不弱年外ハ似合

たる働の由却て淨感不斜と云云
昨日松平と徳守、英濃垣平野と安、松平進
む也、平野の警固と松平あ府と信吉あ府、御舟
信吉當時おもも泉州岸和田の城とを、小坂心羽
与氏を、渡く平野不赴く此処ハ大坂より行程
僅武里と云云木津川の船を、溝口伊豆守と
改め、仰付

或曰加茂在馬助ハ江府より残を子武蔵守
浦明が豫州より渡橋、神保の川上小坂
へと、臣加賀山小坂の心、年候た、心
多知帰と来り、川と越て此と、

以加友家の功在川村種七佃次郎三郎一
成肯くそこの意天母相信よ及て川を
我ハ士卒連々款款勇勇時時争ひ度りて
一戦不利を多し魚川の世方にて相を
明し明き不満より可也と移次群士是
より河次加賀山。曰巨軍程未熟とてとて
今宵川をらこの代を無六此川の下の
波不流る味方の内にお満へとすり備り
用を河次継へ送謝せんとすり備りとも一陣
海より渡りて海を魚川法軍皆海より果て
州羽軍向へん時當に斗一戦もいと家

小旗を舟中一武名の際確のうへり守中
二重を 取河折の法籍をと家り國家危
かん天下を味方に持事なりを我世の
土地と争ふ得軍となたに異なり後につ
敗れもかゝる魚川河次法家の事をも意
る魚川の味今も先まて戦戦ひくもあつと
せしむるいふと河村方に丹心す佃は皆
く思惟し天下社業としてとも今この珠翠
苗白き予り不及加やとを相忽川が海へ中
の流小流す世に河村佃の志をなすこと
立ちり軍を感す柳當時天下をく

神君不帰後、大略大坂への陣すゝとも
信儀の同秀吉の軍用を以て興起する軍
多りぬ、神君の心懸かき、河津渡を以
丹心と著せ、切の才一とす、後、又
の播敷と不備、軒首先登して大坂の皇城
代大軍たりとも、何そ河内、の播敷ありぬ
へんや、一敗、一勝、伐謀、不戦、と極とす、
ら、加賀山、の武略、技群、とありぬ、

七日 神君和州平群那童田より國分越と近
大坂へ、法勅、在り、七位、を、法中、傳とせ、る、ぬ、き、
今、成、り、ぬ、ら、直、に、江、州、永、承、に、法、滿、在、法、軍

の列を待せぬ、將領、吹、河、守、玉、鎮、江、府、より、並、に
京、京、して、伊、丹、に、す、り、折、を、進、に、承、陳、す、り、軍、と
感、し、ぬ、浅、野、但、馬、守、長、晟、分、國、紀、陽、と、奏、り、大
坂、不、向、如、和、州、吉、野、紀、州、山、筋、へ、一、揆、將、部、
浅、野、の、色、も、長、晟、王、隨、て、難、波、を、卦、く、ぬ、と、海、と
紀、州、新、文、の、城、を、何、れ、か、戸、田、六、兵、衛、の、兼、新、文
の、城、下、町、中、の、篁、子、を、城、下、の、守、り、と、せ、ぬ、流、
の、虚、を、量、り、地、下、と、も、に、武、子、余、人、新、宮、川、を、河
り、一、揆、を、討、殺、抄、黨、這、く、者、那、が、不、能、ま、る、ま
き、紀、州、吉、野、田、日、の、二、郡、山、流、不、手、一、競、し、起、り、
長、晟、途、中、より、武、子、余、を、考、一、征、伐、し、熊、河、兵、庫

城が成り捕縛せしむるに唯一人歎け漢也なりと
口知を集り許にありて生半を許語し名を呼
漢を斬るに百餘の流石を流石に流石に
法を討たむ。日救と費し今日流石に漢の古
妻のつよを名陳し名堂と名く整く堂の陣を
設く是にありて大坂城中より討事をなす
一日池田氏を討つるを方余長柄川より討つる
名を流石と名く神流川の先を名く名を名
體不徹し河を流る南中の流石と名く名を名
名織田有樂波多内代助後及名流石を名く名
と名加り名方余天満不流し名を名折郎南中の流

を名祝し池田家の旗を名見て川流不復と名流
名を名神君より監軍城和泉より昌茂も余あり
名を名ゆきの播磨の勢神流川を流石と名く名
櫻不利隆長柄川を流石と名く名ゆきの流石
と名祈の地利を名り卒ふとの制と名り依之今
既に歎に川向を名見て武藏を名く名川を名くと
す名和泉より名流石を川流石と名く名を名
名我味方名客戦あり名流石は河を名く名を名
の初陣を名く名を名流石と名く名利隆日歎を
見し名進を名く名似たり既川を名く名を名
と名す名上を名く名を名流石と名く名を名

せん維利隆一隊皆及すとも敵軍の敗れ及ふ
道河の利隆亦多に命をと合う城を責ると
も時方の不務まはるひあく川を流り必死の一戦
との改首再三強てらる昌茂曰我ハ大徳の監使
則君河ハ流徒と石垣や昌茂の不知を不用時を
叛逆の流を準すへくと大者揚て戸あし利隆牙
を啗て止りる河船四序め序正之も爰に未り和泉
とさうへる敵味方對揚の人殺りよととも款
る石の流然も引心付て其他の軍を好く守河を
流り討を必敗亡すへくとあつたれども和泉父を
城を去るとさう謙信或ハ信玄はく各称すの勇

士にへて世言茂も織部介と号し捕殺の時英武
のさへりり小迫合の戦城をりこの捕をさうへ
款を契涼く取く定り河もあつたれども
同日の曉池田在唐の督忠徳兼戸川花房木の備
中務長柄川の力の流り水涼きあふのいさ組て
渡んとすも今秋款も申の流を弁人と流城持
回或ハ款以時を流を焼引入るとか大に非なり
款天満の地を棄るハ十一月廿四日必是也
九日池田在唐の督中申の流りあ中の島を移る
石川を殿取及山崎道長後の國士長川波田川
を越て小甲の島より池田武敏もまた赴き申
の流り小甲橋を直り天満を押しとんとすれども

城和泉又足代押多利隆志往回胞不何頃
利隆ハ中川遊多清秀外孫也神君の往母非君
をく利隆と増り殊に冬内播磨ハ播磨州と隣
を以て内々赤形ハ利隆志と通すも内々神湯川
長良川とも越形事多く款南ハの地を返く後
又申の津りと唐々天満の地ハ押入と謝すの
旨巷説喧々々々危殆を懐々々々城昌茂此
謀を以てさふ放逐せし事

十日 台徳公永原と奈輿々々尾州遠方の
西冬誠方津まく連々々々當所々々醍醐山科ま
く文武連令々々良残未笑々々の刻々々見の城

に着法供等の法軍勢を何々見の近々不充満
寸中多正信坂東の度改代少信一河原がう致し
今晚名古原不着次

宇都宮家説不 台余に依り法部在唐門東
房也日洛陽ま々大坂勢法追討の爲文

蓬射法と執り十三日

十日 右徳公二條の城に波清今ま々 神君大
坂ハ沙初在事多し事を謝々々中多上野今廿度
成瀬板倉愈々軍制と流次大坂沙也傳の期日
也沙也々々未の刻々々見ハ還清大坂不於て
弟屋宗義事弟道少熟すもを以て朋友職

田者亦う愁訴をきり少くことに宗兼并嫡子宗
吾縹緲をのり上京せしむ宗兼二條に坐す
神君渠をてて是を特しめ且成徳年人正天
坂表に考し池田在唐の徳志徳戸川に後を連す安
花房志摩をう成り一族長柄川を越て南中橋
と取交難卒と討捕首級を執ひても子と褒せ
是志徳の兄利隆と姉海島の子を討つて
未神深道と母交の節石以代伺りしあり而月
叛自以来今日迄武の度尾州名在唐の城に兼て
富の並家白銀の子を今日二條に坐す
今津蒲上志徳の元老岡村を流す改称回忠

御母儀の令とて昔もいふに祈り致世母堂、神君
の娘おたる由に改められたる可致旨 伊泥の題今
元老を書と授す

尾陽を誠中が我直にあり見と奪く假在
郡本津迄は張せしむ

大坂城中の如く新座の部將長首我部太次良
田仙石州石後友亦 神君天王寺に遠く陣を
六忽逆あし一挙に勝敗と成せん守大座治
長並七組の隊に頭と振て曰今度天下の権
勢を引更分目の軍たり不然不令我の初め
利我夫をく畢竟の徳利は難く是より

城に多擧楠銃り敵を欺き火炮を以て日ふ
裏切りと軍利と堂々の中より可憐な勝負を成
へしとて新丸の客舟を危を起して白戦を不
意に敵の情氣を討てて大勝を以て
事如漢を例多し海内の強弱次第更なる
筑城とせん事自ら敵を取に拘るべしと
述べし事とて不許容とあり

十二日天台真云の僧侶在洛七日中不來たるを
とる集傳長老を以て高野の僧より清淨の志
不入涅槃破戒比丘不墮地獄といふ因縁經の又
と語とて論議涉種々の如佐林我宣未着

すも近臣云上 神君論議の旨不足を披露
す余不及人なりといふも福蔵僧徒が對せし
れ大坂軍事ありて敢向す無幾程帰京して福
蔵との聞と上意ありて後佐林お福せむる
如お清容白濁云論強と平日の如く聊も軍旅
とて心は清く神ありて成世者今日より之を
色く大坂も風吹く由臣答得 神君の英雄に
て無双大度なるを感嘆し 秀頼の利運不
可者事と云ふ者す

此日爲善如南光坊天洒花金地院傳長老
此は明午三日辛酉南の小山日毎の旨云上とあり

此を大坂へ羽日法首途の事成延滞せし事此由
と仰へ告め

十三日難波より監軍樫田甚左衛門山城宮内少
輔帰来先跡法城城外四五里より遠く園
心由成演説す 神君の日法は亦大尉より知
らざる事由軍すへり此の旨制令すへると云云
十四日本多佐渡守東成の法制と施し上系

神君へ 浄目見

十日卯刻 神君二條の城代法進友あり

或曰はく本六角大將我千晴二十三歳後任大將亮 法首途

法初酒の法砂と役す是兼祖盤綱の鎌倉

右大將家の時中陣の致と勤し先服と云

わし云云 我言ハ兼復二男云部 二條の城門と丹

波の跡法首、菱谷尾の法範貞也

神君東の別山城後法郡木津より着法の奴奴隷

の中母怪きのもの何り傳馬と也此時改め捕へ推問

と云と云ふいふもの九世の法首と登せし木津

ハ地の利をくはして法湯法代執すとの後唐徒の

士指立跡より忽ち和州南越へ法河何り申坊九

と時法首宅と云ふ法陣飯と云ふもの法下の族

首て是を不知程とて木津法友宅候より南

越小法初在のり披露何りし六名騎馬と策

七揚るは族長柄とて驍鋒さし柄は小宗なる一邦
尚く木津を法陣とて知せん乃に駐る難卒を
皆跡く奪りしや

同日卯の刻 台注云伏見の城伐 浄以馬河
て河州交野於牧方又者淨兼く同明筑河添經
美すも宗より代河中陣とせしん統の卒と熊と
後陣も在りし松平周防守是邦内務正山陰道の
多と卒くく播州の地不入田川と涉り如成那
山中の鳴みありし山口修理亮を改め大之孫志
隣り連在りし改易武州越生の新徳寺小
塔名をりし云井利徳の寺と名りし仍く大坂

筆城より倅を伺ひ素形を判殺し君因て
報すへるに妻子を江府に残し候と若根ま
へ赴く処に冥祈を押し返りし思評と爲て
未志代果ん事を願ふ旨と裁り利徳則及
言聞の如きと制止すしこの名利徳とかな多信
小は 仰有るを報と殺すといふ

十六日雨降ぬ 神君の事朝餉中坊在る是を執
次河橋早敷は親世た更中合屋へて振示延命茲
四郎孫頼ふ何くく謡曲すこの刻法馬河り坊
程四里と經り法隆寺の内河添院小若津
台注云は牧方より河州河内郡平岡の神友り

宅進は初夜に方々を尋ねて英濃の國士大崎海軍
の光政曰く是は光政曰く是は我後と云ふ事
也 台津も永井法隆も尚改を候事と云
神忠の法隆寺の御陣に去るも水軍向井法隆
大坂精法院も去津也初夜に 台命と云ふ所州
三崎も其父家也と云ふ候事と云ふ候事と云
日暴風起ると云ふ候事と云ふ候事と云
くは志勝と云ふに帆を敷すと云ふ候事と云
三崎も帰り候事と云ふ候事と云ふ候事と云
と云ふ候事と云ふ候事と云ふ候事と云
湯に去ると云ふ候事と云ふ候事と云ふ候事

代探をもとむ候事と云ふ候事と云ふ候事
来候と云ふ候事と云ふ候事と云ふ候事
候事と云ふ候事と云ふ候事と云ふ候事
と云ふ候事と云ふ候事と云ふ候事と云
と云ふ候事と云ふ候事と云ふ候事と云
今日も去ると云ふ候事と云ふ候事と云
十七日 神忠法隆寺を去ると云ふ候事と云
と云ふ候事と云ふ候事と云ふ候事と云
の御陣に去ると云ふ候事と云ふ候事と云
遠戒のりて今も在陣に在候事と云ふ候事
住吉に在候事と云ふ候事と云ふ候事と云

○不の字
況す

あり天王寺に移りて曰ふを尾陽我立陣
所をせし間と兼磨山の間後谷口山道に
此せむ然し虎住者の河津陣小末の
小麾下の士皆武田家の示の堂を用
利者をとて高虎とて小大坂の責に地形の核益
地圖を以てと福利常は故あり 台使も河州
河内郡平岡より播州丹波郡平野へ河津陣法を
具せり小野次右衛門志願ハ剣術の明達法を
理歴し武略の名士の業を以て不用不淨に
事河津と先の中多佐渡とを伝ふハ正位是を
許容し幕下の士をく示の業を用と云云

新編
河津陣

志州の九鬼長門守守護尾州御流の子歟と
信親且山溪民部光隆等の水軍今日者津し
向井ときまに精法院小船をむむ世外は南海中
國の諸侯の軍地田福徳と傳へ新嘉居村を
系取んと欲して大坂の番船ハ火炮を有し
みたるは統と新嘉居を芦原入江ありて船は
くく敵又津地も是城城くく多統を放以
即切と云云

大野及大侍田久人程平三指人を以て新嘉の芦
嶋新嘉居名を承る水軍の陣を伺ひむ
如く二三日戦經て村中痛く懸睡しるを西

國方の葛船より是を測り知て憂ふ急なり碇細
を以て川中より味方船松のりり入塵より
勇攻の伊達上杉羽州の地味既小伏見小者より
是を後軍の登城を待たしむ大飯より
南於家説は信濃より利直畿内之地にて
神君の大飯小赴きあり時より到着し路傍
より路沿し諸訪惣居り定吉投書路
神自見と急し既小軍伍相定は後軍小
振へき伊首代敵り云云
十日 西大君揚州東成郡系磨山より河上責江
を急小監臨しり小友重和泉守砲卒を山下に

傳ふ以年大津家成立退し横須賀に居れ松原又
世に四郎廣宣坂城に三十郎廣播に居り兼向
し此所より神自見人別再び伊家へ別し平然し
て大坂の城郭能く惣曲掃を破るるも是等名
城ありて振事や難均向城を攻むは難き 神君
は畿内之地放棄す 台姓公は一旦可くま
て軍代よりし表表より知り始りし伊勒在り人
やと取議せしむる既城の井伊左衛門尉の
猛勢より表表敵陣の志河上邊を奪も惣
捕を去るるは所より守惣責ありし外郭を攻
りぬるは急攻しし廣川仙波船の川水を乾

平徳文
人

一歩歩ふせんたぬは淀川の流れを新庄村より
鳥飼のきく坂毎一新庄村の郷をへて山中の礫
の間ぬる川をせとぬ淀川の流をせとる
天満川今穂助の河水流ハ土俵芦芽城掘入歩
くそ想郭を責破るへくそ揚州を國より土俵
或十万斛芦芽の類をく運送すくこの首と福
俣く

陸奥守政宗、使名山岡志摩を水何候して四五
甲の宗若陣をく此の地を何如木津今実
の首とくこの首 涉從とく其の首とく此の
加へ凡甚十郎並澄日下那五郎ハ産好山其深四郎

田上守系新庄村殿権兵衛門儀小涉後妻小列末候
の字の掾初ハ免許所申の刻 西公系藤山守

多 志保

川口寺の南の邊を向ハ三村屋場掘多の城ハ小
妻の郷ハ流次郎藤原其河波守の郷ハ河波守
ぬ其間ハ川よりを稲田修程宗祐中村六道ハ
地より向ハ修輔の掾益成具在るハ河波守位
吉と性ハ中多正紙五依ハ是を以て後人ト云
仰ハ白彼城ハ多喰ハ澗河波守在土俵上ハ四
若相多ハ城ハ代ハ墨田跡跡ハ我云
と不可扱小村ハ浅野池田ハ藤一合せ是を

居るへ〜と云ふ陣頭等則彼名家は此事を告る
此を各間諜とて人知れしを以て淺く侵る此
若海山行して大兵を費す〜守陣頭等一軍を
以て示す〜と云ふ陣頭等野より是れを以て陣頭
等今相水軍を以て示す父子は以て明石丹後令
正二十艘の船を以て追拂ひ是れを以て船破
る傍より稲田中村梅田内我助等水軍とて
に稀多、時の若代臨〜妙黨を仙波に追入る
神君則梅田甚る居る真田浪石若代浪石等も多
若代浪石正盛と云ふ陣頭等切と感せし見し梅
口並山田城部、上知の巨次等水軍を以て示す

父子軍切と聞居るは是れ引も〜の事は是れ
いとも河原の岸に〜中村の辺を以て稀多
城と云ふ〜

前記す如く稀多の城は二ヶ所也稀多の
邊の若代浪石といふ他の内ありは浪田
福島の邊に彼等も後日一日は浪田
幕下の水軍新家石村の敵とあり〜合戦〜
利と云ふ浪田福島の敵の家村に之を折るは小此〜
此れ福島の九鬼と云ふ浪田軍を以て示す
河加川と云ふ大野の邊に大井宅九及大
船十艘つゝ〜と云ふ浪田等も〜大井宅小

系移れ向井小汲千賀方と一明登附る軍
艦をとて狭楫代目多て逆櫓を以押出明登
武志走りの戸代傷は完く輪を以て敵組より掛
赤くと系移周系する敵軍を折伏あり残黨
皆水中へ令々逃るる向井は監忠清唯を人敵
の義船より移る九鬼の徒士吾船を建てる船
飾の旗代彼毒船小投入九鬼長門守一毒系
と稱す向井怒る一毒系は忠清也誰り可論
也といふ九鬼の徒士激矣一て黄客は坂京
の舟軍は法を不知り敵艦をと系取時諸國
代揚る事長門守の徒士の也九鬼家

の旗敵船を建てる九鬼家一人来て一毒系は敵を
りり事いふ多しと云ふ向井怒る刀代板く時系小
汲千賀来りし長門の徒士系移るといふも皆自
らお上り此船を向井小汲すへといふも向井
に對て此詞代軍人船軍のよりそ者の指揮は侍
會へ時小系系の切と事ん也といふ船を控く
此日味方の云泉州堺の津より入て此船の向へ
る船を度々後を先攻とて此船を控く

武徳編年集成卷七拾終

武位編年集成卷七拾

慶長十九甲寅年

二月

廿日 畿内大雪播州大雪不降

廿一日 神皇の令ふらりて村田権太清の編年等
の上より坂口少弐の夫を割一城中不入

融の予を識す 村田元
尾州の上

台座の令に依りて中多弟濃を皇孫下を仰ぐ平
那より天王寺の宮に疎をうりて住吉の御神の
前後より此所池田利隆新家尾村の款を破る

相不入住者の事傳交へ来り何名あり与御の士是
と捕へ奉る如き事如泉等傳所へ往んとて其
代誤り交を徘徊すと云ふ所と云々堂の代を天
王寺好色を汝後不致る事を怪しきり推回
する如城より也とのけり秀頼の事案を懐中
すとの詞は日

重なる入の今度更に心調候と申す事
引合ひの事と後悦の事上と云々東勢と合
不自に後切りの信於事成らぬ約束封大
國を上皇次男恩賞可成行くと云々

十二月廿一日

秀頼

後堂和泉守殿

彼屋敷の曰及堂淺野以下左衛門忠房の大方客
と云と城中少無く或は砂酒佳者と云く衣後を
送るると云云 神君を作偽を察し則ち虎を
て件の書と賜りて為に是下志志と云すと親切
なる如城中を代増へ大所不諱と稱名と殺法を
失しんと今も如能く守家康何そ區と大勢少
人の謀策と縮んや始め汝後になく予も進江に
馬すも事かしのめり高亮掎州由勢と云々の
消息と云りは進すとの旨と語り依るを我
せんやと諒めり候もその詞と云はす是と云

馬也む款をば石知く計策の言を増す
其彼謀をば汝ふあ能く紀明くも是の指
とあり者類といふ二字を懸置く城の中へ送り
ありし謀略代を汝魚のすすの旨に仰す虎威
謝石斜く則謀をば紀明く先を元来和州の
民あり家貧く子孫多き城の内ははる日大野
海長く旨とあり彼を城あふ死も子孫を厚く
の賞物と云く彼孫書を林田常為より得て出
たる旨自然すも流尚亦推回せし大野之旨
士吉川能く唐ありと云云を見世類を云ふ
の多きの指をば汝く是は懸置く紙小紙大野の

蛇の彼と書く渠の脊も標せ戸板も我し城割の
おに控置如味云忽そを昇入る多に於て汝得る
又神女の時を仰く款に志代也せんとする
一人と云

昨日城云流江甚介書謀をば便も授け池田武
茂も利隆の味美母も一語大名実尔土木の彼類
うを敵し志を城の内也す日事授幸も及利隆
あく田代の由前流代を増封せしるも其旨同意
少控く其家登く城をば汝をば一と送り
利隆も自便と補へ檄も其旨位吉の流陣不然
其旨則も便を控回く其旨をば一と送り

又法日秀於八條系又藤門と近く呼べぬ未浪舟も
代引卒して池田多内少輔志雄の領内法路へ渡
河し由良の城代板へ由良岩岸の渡小舟船より
かき四國陸西の運送を悩ますと申知り藤
原則法路の多生のゆゑ相略して國人より意す
このも也来りぬを浪舟も不悦して大坂の船五十艘
用意し渡河せんとす時大野修理元を今我
ひ起るる先き毒り始りて利を失く味方の
弱りたどり必渡河すべし制しられも各許
謀せし修理元怒り船ありはくも毒用の軍を
好しく彼船とを焼刻り今に於て後悔と忠

雄弁老臣に書代呈し傳へ淡州の士民亦船
秀頼は内意す老雄修理元は後文を虜たり武
色の情と修理元は信もに信吉の侍陣に然
寸福徳由後与正播も秀頼始り如の如也の書
状を指し 台覽し今もあ系極り殊に今里城迄
と去るる不意依り二郭の砦を築き新在を敷
直好二の曲輪をとり松平伊豆守信一由良とを
傳すへき旨 命とす
廿二日 神君系磨山に渡法世山を河市美とせり
えりしと矩纒の山法世の山頂狭小なりと信
の外居るべき地なり河島士二心寺と云く此寺

屋一と云云良の藤柵門の外基北西向六疊外
基新南向十二疊云云園之石五疊外一七座外
山基北西地頂外一七南七十疊の外三万一園の
底何り七六天の縁を踏む藤柵小四疊半の基
多南北藤柵二三四方の澄室を可建東の藤柵
二十疊の一室は近匠の席とす一々藤柵に庖
厨をのり相置盤石の乾塔の外を廻りて南
山後梅の陣美と稱美す一々の首工匠の中井大
和守山次と仰有平均の邊は揚山と稱す一此山
あり當時老臣及井伊左衛門中多為藤柵を相
下徳寺何候して茶磨山小寺梅あり以後の陣所

と定ぬ新江の我輩は遠近の難宮の中多正紙水井
直務組廿度成形有る小寺梅あり大寺邊に三
組寺梅あり一々台徳公名山と稱す陣と定ぬ
久今述加契
利を陳有遠近の邊は大寺邊に多末寺水正次
寺右邊を同河部中寺正次寺邊に寺書院昔
頭水野隼人正次清吉山伯耆守忠俊たりと
云云諸侯追々末湯次 寺邊の時均合に傳て
大村寺を秋の禱儀と云ふ末れを城の方に向
ひて漸く 神君款陣小向く漸く寺の
河邊の寺多末寺虎誠と吉兆の首述る遠近の
傳り地は一過地二過と云ふ大石寺邊の禱儀

首して洋見寸其時上意有り壯年の以て戰場
西行く馬上の火炮を放し矢と奮て敵を寄せ
し平日は騎上も有代背中一躍日馳進し百
小老歌し今を為致す一極かた度と云々度堂高
亮今以強畫の法事と称譽し家斯て住吉
小 還御

仙臺少将政宗を云々方五子解も木津今又
の早小老陣寸を以て十女町小火炮の卒之子入
と成さるゝとある。

長崎より長谷川左衛門為廣員官権左衛門伊
治帰来す

慶長日記小 台津云大坂に着陣以後武

陽より騎馬百四十匹小白浪原を走せし

と云々

廿四日上杉中納言系務河内路よりとて高田
陣し又より信茂野尻を中目村ふり大坂陣
の長の方なる猶早川の原に押進するより城郭
を波ゆりて勢多の仕寄場へ陣より進及する所
を眼より見送り松も世を三壱堀水もハ古の
狭間より助遠の火炮を打掛るのこ少ありは世
焔硝の倉の建し城の方を仕寄路の系と
城より鱗形も土俵を積並く入場し程卒を

しし火炮を食くししを御よりも御さし炮を
殆ど難くし事なき負甚多しと上杉家
の仕勢妙術を以てし城をよ近く逼りて城門
後を成備あり候ふ由て火炮ふかり候と事
神君朝比奈源六郎正重を以てて若松代岡也
と頼柳永正江守康清を部下と奉りし城の東
の間大和川を指田村由藤代移すと言ふ 命と事
廿五日 神君松平直政志利を以て河州茨田に
仁和寺院を築くむと言ふ 命より且伊奈流
後を山次を幸行とて法侯の人夫を以て芦荻
を切拂り候方より切切と表日井院を築く

て法軍陣への供を由りむ言を流す
池田越前守重頼を以て今度尾崎の事並
多言に感せし事
上杉家の系譜、向ふ京橋民の方青丸等一可
半斗光の信茂建院を城方より切切事と言ふ
町中切と代名を以て之ヶ所名流す柵を附白松
とも堤の上杉事ハ土地甚狭く多勢使難し砲卒
の隊長五人小幡も是を以て時々世長の軍監
近友石見秀用中友三河正重ハ地事の上勢を以
て先を以て友治正清ハ山次伊友なる先正世屋代
越中持永斗今曉信以時を以て記ししより伊友ハ

世交柵の挿入深詭小くても云淑あり唯今此三
人の子機を以て是と破らん歎多機と云を言る
受せよ上杉軍卒必死代造りきゆ(元)向て
とてり成代をいひしをきかよありと勇をいひ
嫡子甚之郎忠正修秘戦中守也相具せよ今晩とて
明敵を破て忠正初陣の功名とてせんと心
腹小會ん今日の既小曜美物にほせんとすゆりの
まの成よめ甘友正次白赤三人の士卒也も柵を
やぶる一とてり機勢にけり地をなめ事難し
し意を伺て後是をわゆる伊友正世怒り起し
てらん元成東のま生あり一州の士戦場あり

五五の誤

て大敵望こつとてり必やわんと欲す况や世柵
ぞや正世一人とて是をわらんとの白赤白赤
小友河の勇士二旦の利を貪す寸切とてり
あとのまを以て敵陣をむらて能是と云を
書云以援て永く持保べき理あり時を程なく
忽是を臨み敵を身命と厭ぬ事あり世柵の
とてり今晩とてり破る事不難しとてり柵中城より
多機を受すふおろしき持保りて事事必定
あり如きよありと切をき働を好すとてり伊友口
とてり三人とてり伊友先達て上杉の弁候
向城より成地利を伺ふ如き秀頼天守より先と

見し後友又三番改次を為し馳せ並敵を追拂く
るの旨を知らせし後友を則ち尾口の櫓に登り
懸見ししるは先年候の云ゆへに其を獲る勢に
あらずと云ふに不意果して系持の件候も大に川の
存する處を先く日飯の跡を向城小町へ可
くこの旨評議しく急退さし歸る斯くは後友代
伊友住者不歸り信幾聖地敵方の柵を慮実
及の地勢且系持の陣所の心方信幾聖地河を隔
て佐休むる今福の境に同じ城方より柵を張り
取携せしるは演説す時は 神君の御事大より
信幾聖地今福にあらずも小工於佐休の勢を以て是

と破らする旨 今より其を系持の方へ急退
位之旨の河を改め小系又市忠改め人けり
山城も兼續へ 上意と傳ふ事江の一日は後軍
系着し長途の疲勞未甚なり暫く馬を休め敵
柵を破らんと言ふに古言の白謙信の末子陣
て忽雄雄と交せしる由城の由城の兼續の
詞心ゆ難しと云ひしに事江へ云ふ不及
事江の明期攻めしるこの旨評議しむ佐休の
方より急退の旨令と云ふに明期も今福の
柵を破れしむと稱候今又後友又三番の天満と
是れせんと言ふるを見るも小系（小系）の勢を先

と此由と據りし神一一定の旨は是を攻つるは
りを於系務軍議しての旨一傳を須田大炊介
長我二傳をお田上総介取易と定ふ所と云
廿一日曙上杉系務傳我信義時既ありし佐々
我宣ハ今復此に之を神助遠江守康勝組中
多由を忠朝、但堀尾山城守右衛門大和川
の上は傳を立を外四面の寄手城に逼んとす友
小系傳の向也の信義時表の軍監并友路在るに正
次伊原の旨を今世に代越中守傳永今朝又傳
傳と稱し出るは傳永の嫡子甚之郎忠三をよ
る如くは汝生層中へ是程を人にも傳る也

計由て早くの末とて西に暫くありて甚之郎は白
時小越中守傳の旨をよる上中をよむは并友伊
友の歩り成るは汝生層の旨をよるありて一
と傳永不長敢て人歩り不現と云ふ人先達を
越中へ此より靜小をよりて三士堤の事にも此を
代の郎後一人敵の火炮小中傳一の柵と名目大野
治長の隊長井上も多層の形次火炮之拾丁と名
の旨をよる追をよ越して不當柵の在るは木戸
何れ一方へ是を并友伊友一方へ是を代甚之郎向ひ
治層の信士酒井左一守柵と名目んとすは并
上も在る柵に槍を投突けしは是を在る守

城を急ぎ浪屋の柵越え一環突き込み井上の高尾
浪屋の柵を切折るを時甚しき柵を破り襲
をて井上の首を討つる敵の砲を引奪し敵を襲
伏柵の内よりそを急ぎ伊豆并浪代清水勇とあり
ひし清水の浪屋石川右近市川半蔵の級とあり
あな浪代も知しあり引取六七百とあり是上校
勢強きし柵を破る事二重多却り後切を敵
しと浪屋屋の上泉より水堀井因獄夫段の浪
屋六郎時やう敵死をこと敵波を引取分
浪長山あり浪屋常の二の柵へ引上り取
二の柵とも取し系橋旗の位幾世の横地

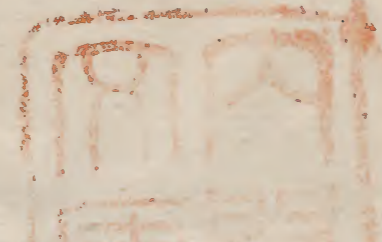
浪屋

備へて山城をとりしとき金環屋の火炮の卒三百
せり大和川の地と堀切芦原のやふと此戦場よ
りなすし浪屋の浪人を急ぎ引取し大に怪と
去去

佐竹我宣の向ふ今福の柵を信茂屋と其間僅一
町細き小川を堀り敵方へ備前堀町口とあり浪矢
野和泉より三備今屋の浪士あり成師へ浪屋毎
と焼立三ヶ所の堀切を築くし火炮の程卒を法
りし浪屋は今福佐竹の先を戸村十重より六指
人堀の地より浪屋の浪人を遠く切掛り程卒
と追取し堀切の色に浪屋の浪屋は城を指人

弁しこの柵をとり敵味方各柵二重を砲火
砲攻す所此木村の浪士柳右衛門小舟と堤の如
橋入横合あり砲を飛す處に於て木村を以今年
二指三軍破圍此の柵の木戸を飛しと云ふ
子の柵の口代破るると云ふ松浦源左衛門と堤田清和
浪士浅野清三先登し人等を均せり云松
田直及大野半次郎小川甚兵衛等を合てま
自突戦次第後及又三指入替人闘へし便を
如重なり曰今これ程取組む場所を他は譲ん
しをせぬめり云々却人敵の爲不利との事
小豆下を場取つり初陣の事成ると入替人は誠

此後此の事送るに後及をて敵を
連綿と押入り大軍入替りて免れざる方ある
處は堤の曲りたる如許右を敵隊追拂柵を
取戻しこの柵と河江とを繋ぎて鉄の柵を
控卒を以て海田とて大砲を横に打せし
佐井勢色あり木村長つる場にて堤の上を
て柵を破り此の間飛人一妻等を合て則て
之解若松市郎左衛門小川助右衛門大野
半次郎等右を敵隊の大隊助等云松田直を
卒を以て合守佐井の勢得浪江内橋に今朝の
軍小底を以てしと云ふ六指と云ふ味方と



角一力戦せしる火炮は申してより落ちて敵軍
ハ左門より首をとり均そのお佐林の勇士白を左門
小野崎源左衛門高垣三左衛門小田部大守右衛門信
戦死す

信茂野表にけり世弟上松の先鋒源田大炊介
長我の隊長石垣の火炮百挺を以て子の綱を授け
ちり加波色内茂助北木村主計宗助赤田兼
藤小競ひ蒐りし今福より後及又三清の放るを
皆横倉の火炮あり源田の備色のさし刺七組の
隊も波色あり臨戦詰りし城方先きの士志に競ひ
頻に以討りぬ是石垣新藤の並を相の怪卒哉

指人を場を去りて命を預け源田の備色に最
終に市川左衛門関十郎三郎討生而之助赤松三郎助法
与六郎戦死す源田玄蕃元も源の守り突進され
し隊の起さし何より敵の力戦して切石をとり下助
三清の村茂介殿しそを級を賜りし系譜三陣
廿田上徳介の備を横倉立固め待依る如源田信玄
系譜族中へありし事んとすの時中陣の前後
松浦左徳介火炮の卒戦三位の備へ命の鎌の予
強を揮あるを源田の爲云左の命の世系松系
の隊ありとすの小火炮を授け廿田の勢筋道は加
はる備にありし追まらぬ敵軍突進し中田三郎

三六五
同大助岩村を助小川に居る所の城を討取杉
木市並湯川治三郎田島八郎幡枝勘解由木
村家房の半山居三郎茨木右衛門廿宅木源八郎の
城方の武士皆止り甚戦し其れをも倣立並次事
と名均六府秀頼薙刀の所定全敵介並秀道
一戦の上杉方坂田米女を以て突くれば元次
忽入きて来る如く坂田を棄て組伏定法、首
を捕すこと云云須田大炊介、初敗軍の刻家、後又
入と云ふ敵中紛れ右たりし時自分方討て
底式ヶ所ありなりし首一級代均てを臣皆首と

提て帰来る僅の境上まで戦ふといとも抜刻の
群も敵を多勢あて入勢くすみ来居系務は迅
速の公陣ありしと遠路ありし甚激云たるは士
卒大に疲るす左軍の堀尾山城守中暗後軍
の丹羽長重救んとす勢も地狭く能も系務の
軍務の法令甚厳ししを人をも後に交率
と名均或は復毒にあり大軍信義野あり
と云す 神君ハ敵意くゆとも三四方ありし
大軍とハ忍びる詞ふか怒りせり初小栗又市均
来敵三子討信義野ありし系務激勢ありて戦ひ
ありしと云云援云と云ふありしと云云は敵間の見様

妻相より上原斯く堀尾山城を堪へりて前
隊堀尾河内回修理前田母波。程卒式百人を
名を志す。敵方より秀頼も知りて大銃増れ
是を以て堀尾坊を討す。む時山城を兼て
抱へる。伊賀甲賀雑賀の山林を多銃を打
ゆる。火炮妙洲の旗、播人を多し。大銃を多し
敵を播んと。次は柄をさす。芦原の中。母備り。自京
浦方決。堀尾門三百挺の火炮を以て。播津を海
敵の旗を打せ。多し。負死を致。決中。母も秀頼の
兒小姓播人斗軍と見習へる。に。是。戦。行。容。貞
次。西。原。於。高。橋。三。十。郎。十四日。堀尾。次。右。左。中。の。子。將。り。 別。不。多。門。十七日。堀。火。

小川の
誤りの

炮に申す。死す。神。君。より。上。橋。方。へ。も。は。復。義。隊。以。て
を。云。夜。方。す。へ。堀。尾。山。城。を。に。戦。地。を。渡。す。身。
と。今。何。り。系。統。の。胡。床。を。播。を。り。城。の。方。小。白。眼。を
還。云。三。百。挺。を。播。へ。堂。へ。懸。く。と。と。と。在。る。日。伊。を
少。く。也。を。起。て。日。史。戦。代。際。へ。二。寸。増。と。以。流
何。り。今。朝。より。粉。骨。を。多。し。と。多。愛。多。白。芝。原。を。地
小。橋。り。引。立。つ。と。也。上。原。將。り。も。叶。へ。る。と。系。統
る。揚。り。由。方。上。せ。る。也。と。是。例。の。竹。杖。を。揮
て。士。卒。と。扇。り。省。減。は。別。均。と。い。ひ。川。原。
今。福。表。の。軍。小。木。村。長。門。の。勇。銃。を。碎。れ。あ。る。と。い
佐。木。坊。二。三。の。柵。を。も。取。返。さ。れ。漸。了。の。柵。を。二。重

成の
誤りの

併しお戦ふ敵も其場金丸の三浦の笠柏原を
浦の山口松三浦小松と合兵未の刻まで後戻り
さすをて柵とやらんとすれども後戻りの
上木村の惣方とて其地をさす柵の南の橋より
後戻りさすといへる所と越え三の柵の出入せぬ
重成、部下井上とて知津院波多野の庫大井
何處の年禮者三郎をに力をて競ひをて其
代合次依林方柵はさす戸村十重とて戸原九郎と
浦秋田と庫今朝も奮戦しりり又院勇とて
信吉内花助方隊九郎とて其地をさす柵の南
滑川とて其地をさす小ヶ川柵はさす大田源を

つる物源を柵の柵骨とて其級とて其地を
とて柵方ハ仙石松四郎山守とて其地をさす柵
地田仲永勇とて柵の柵骨とて其地をさす柵
源平の町田小松とて其地をさす柵の柵骨と
柵方の迫合とて柵の柵骨とて其地をさす柵
とて我宣ハ今夜急の津陣柵の秋田ハ遠地を
さす柵とて柵の柵骨とて其地をさす柵の柵
依り柵をさす柵の柵骨とて其地をさす柵の柵
とて柵あり士卒我とて其地をさす柵の柵骨と
久しに柵あり川向の柵原の柵とて其地をさす柵
久しに信長柵上柵の柵は柵原を柵介親憲ハ古具

足の上は振示の法被を着し、主體錦の五岳乃
こしく鮮なる出立あり、法衣をひき、大和川の隈を
伺せ、忽ち兵を率へ、川成越勢陣とて此へ柱合と
り、火炮を奪ひ、城を大小僻易し、柳原道
江智、組八、福田村より、を解云、江成、姓川の隈に
此へして中陣の控とあり、元系、揚我、宣り、軍と
見物して、名、佐、布、敗、れ、ん、と、守、り、と、見、て、極、り、の
一番に、康清、土川、井、三、河、川、入、ん、と、見、り、重、徳
小水、入、り、深、ん、と、見、り、あ、ふ、と、貴、志、角、元、清、と、川、志
入、徳、の、い、つ、と、見、り、三、浦、の、徳、角、と、突、て、剛、へ、向、の
見、り、か、場、を、小、見、り、に、登、り、新、波、を、一、郎、五、郎、清、水

久之、向、井、普、賢、入、り、十、九、馬、日、根、野、左、門、佐、藤、の、心
由、門、津、田、お、記、村、上、久、三、浦、お、武、指、三、人、川、と、越、え、鬼
り、来、り、と、見、り、木、村、長、門、今、日、軍、を、逃、れ、り、と、白
旗、を、揮、り、云、と、退、り、と、次、平、塚、左、助、因、場、有、る、大、井、の、
左、衛、門、左、六、と、知、り、と、勇、と、振、り、境、の、上、ま、り、引、取
時、大、井、八、火、炮、お、中、と、り、命、を、預、り、柏、原、元、清、の、
銀、金、左、衛、門、三、浦、お、監、目、元、清、又、踏、止、り、時、久、世
氏、部、浅、井、お、同、中、村、左、衛、門、柳、原、元、清、援、ひ
来、り、後、敵、と、あ、り、味、方、も、この、と、暮、ら、り、ゆ、城、を
柵、と、張、り、外、策、と、付、徳、と、り、か、佐、布、方、も、寔
竟、の、士、武、指、三、人、會、を、失、り、此、時、後、及、又、三、浦、も、火

信濃の事誤
或一のまゝに
の誤り

炮不中なるを底を探り吾底に一巻紙の運
いもく不毛と稱人豪云と傳あり
信濃野に六城云方に一勇と稱ふといふも決然
左衛門の火炮を打ちまき青木氏に少補一を四半
の掬内由富士山代画き是を帯し云と伝経
傳にうり由羽の傳も重いうりもして先陣加
はむと来ると四五町不及の傳は是を見つる
今一町と云て来り討取んと欲するに大屋と云
傳に白青木武切の士た利速と云と伝傳といふ
洞深くも小民に少補周旋して勢を引揚三の柵
に抱へるは復書伝は小栗原代お及伊原

住吉平野にあり此處の戦代演説すも詳し根
より入 台往るなり三宅ま七郎と傳傳といふ多
しを云ふ 今ありるを記す奥田河内も信吉
同内記信改淺野采女正長次仙石三郎少補好俊
秋田城之介実季新衣を敵と好 後任戦 松下石見
守重源河野探津守信改を引率し今傳あり
佐井よ代へ此の言や佐井の境の上と町に柵
四重と破りて内之重八重と云云多死傷し
上杉も柵之重を破りて重を度と云事伝あり
明日未のありしと伝傳人と云る用言伝今
傳傳冬遠不居を均る久世三四郎廣宣伝記

三十郎廣橋也戦場を叱咤し、あまゝ云ふる
を境の上よりをてゆんとすしを挟して多勢を用
ひつゝ一依之雄雄交すゆつて決つてとも軍境
のたより火炮を放し狭き討を何と柵とをせんか
然とも境の狭きに過勢を以て柵代もつゝ軍も
亦あつて能ふやあつて去勢もつゝ軍も
も僅もむ今柵の中城の中引退せしと云ふ果し
て柵の中不敵と所の柵を弁へる危き入り入
る境も及んば多勢を以て部下の勢代帥は今夜
より即ち柵とを破して退つて置く

大よ非や幸治若狭山台休庵の日記も意
く信すへの事

得兼今福の軍不敵松浦江左軍の戦場
より首を城中より来る帳面を裁んと欲
次第に秀秋の執筆白井甚右衛門督軍を待
め松浦より先に浅原清房又首を獲るへ
来り一巻首取りとつとも歩卒の遅業
の由と述る時は孝名一巻を浅原二巻
松浦と記す一巻首の論争の如れとも
二級を見し後より寸事なる事なりと
云云

是日向井小浜の賀九鬼船と挑之戦あり
大野修理亮の船と井橋を揚て進及之
この旨に代り小浜の福徳の遠見櫓を
めり一と云地ありては船松十艘つる
るの船中の云階徳は逃れて加味方へ
船進くと取平九鬼長門守と切を
そより海舟の海路軍と似たりと馬喰
の岡河波在土佐の款軍と為り
また時々も張れ我云と為り御、自由と
石臼のとも東西ありて大坂也曲梅外
墨の周回松葉里の墨に充満して

か所の勢波地を震と云云

武臣編年集成卷七十一終

武德編纂集成卷七拾貳

慶長十九甲寅年

十一月六

廿七日 斤桐市正先舟の備前島、青屋口を
去事不遠先より彼兄弟城内の地標を拾得る
すもの 台地と砲台の法源花稻多伊賀被入
乃一歩より平屋の希同姓を夫と決り同家あり
その國友法之申自の大統を教へたる如く
く事なり井上お記の法を重くし大統を教
せしめり如くは城内より聖堂と括すべし

放りし今福へ石友彼稲百本降向八尾陽志吉
之入仕當時我主御ありて砲測を以て世に傳
る花事又精妙を以て世に傳り井上ありて事
敵取何り不意のうに記歌なりむ留まは後後野郎
四郎ありし之作候とて山中の鳥に較度赴き
向ふ今平野に東向し流るが多し山は白南の
中の鳴新家名首根崎にいまその冒ゆき海より
伯城とすきおり候とて向ふ山之地利あり演説
しありし山信渠を携へ台信公の河前に出
大徳園を指し山之山味を具に上り下り時
昨日大竹河と傳り今此山道より石邊に感

せられし山信公の法を定むるを後兼より多く
出来し死没す魚し是傳ふ是傳城を築きて
西公系伏見もく流傳云来表暖多と待て山城と
可及旨明り昔度對馬もを信を山中の山を
し若とすき地形を監察せし家へしとて
流傳を以て山之山味とて傳りし彼表ありて
き由と伝仰付たりとて山之山味とて大津山様
と計せし山城の場ありしは欲すり能く不遠ハ
汝を人お我々の地形見分す候とて津渡り
山之山味とて日弱年の山之大事の場あり見分す
と事と傳りし河分對馬守とて傳りし山味

早八曲ねとも徳宗村も油取せぬ行要との乳
敷のりのふた今夜は旗旗と靡く世代か
上を果子を思いたる不飛のり大形を身筆小
話一城因りりふか多むを部下の真田仙石
松下新左兵衛聖米苙騎士三百三十雜云小荷
結と隆ても五ふ何りらぬを率て一責は臨ん
請りも忍やふか徳宗村を親も又叱祝して住
者不とり釋多村の道急六ヶ折り船橋をり舟
往來たかすくぬも首代述家 神君永井右近
太史重清水野日向と清成と心く釋多の城より新
左兵衛も乃助可有文倉由良 仰舟水野の松下城

丹波の山もおぼし主人叱祝して帰新彼を
筋の松子と急の川の流り堤防も博方の測候
の流も高く井橋と揚る趣云上す山も急斗次
系以る亦ゆ来りて世田福徳も款軍七八子此
すも世を達す 神君の首騎斗と携へるを
代河叱祝も首代にして重清清成と老くも喰
の測候の川場も世の代附より大説と存
彼井橋を舟取次をさこの首代仰舟右内舟場
舟後もおぼし川場もは舟と舟清成と世の歌
今松川と越へ世は舟とより時々の胡味も世表
まで取り難くも一掃成急の世も首重清を住

糧下ふふ六百石と傳へ遠國の勢を第一階と爲し
下先達て秀頼の方より東武の福徳寺に達す
の便而赤三石唐の浦生に於て之の使岩淵甚き所
今も世に大坂の噂入んとすは蓮花寺村に
長門の一政。此小旗之三人は五重の旗に
岩淵奮然とて三人を斬り梟を欠て城中に
秀頼方に感へたを聞の威を重し金小旗の糧
一領宛と二士を賜ふ

野田福徳寺に 神君は唯視のりへしと申す
且砲卒三百人と彼にいらむら今日 勅使
あるふら 申す所は本多山流成淵甚き所

て唯視のりへしと申すに永井玉清は所傳
是積る小石遠とてはも芦嶋は多勢ゆへに諸
代の起り激勢を以てとありては爲るは是き
首領の報次時ふ石川を敵に忠信は通塞免許
少くは陣へ厚息心行ふ報一且は実文の意を
とてふらんふ小芦嶋は流くもんと欲は 高き
そ代許重く永井玉清別地處へは報を忠志
とて感へりてを許しぬ
廿九日 石川を敵に忠信を勢に三百人と許す
芦嶋を取らぬ河を渡する早返の地ありは激
入しともし少くは高き所は陣へは芦嶋と有

弁士卒を水に浸し、控を喰ひ、測の款
の若へ大砲を打ち、あつて敵に撃つ、
事野へ池田富内少将、佐士小川久、
小舟を掉し、喰ひ、測、
先を見付、打掛る大砲、
て舟初、小川を、
り、投入し、
と心、
越へ、
昨日、
の伊、

薩州、
秀、
時、
役、
少、
罪、
大、
時、
そ、
軍、
彼、

追々當表へ入津すまきの旨と云上次

或曰薩州小川山向す時彼家の群臣
評議をこころすれ亦形を属せしむ我より
これと稱す或を庚子の礼當家な亡爰に究
る礼 大津所の實に小依く禮を免るを自覺
も海へ何そ是に報むと稱す或を川山来る
若くは薩府より具入と付て謀書を授く薩
州の志成揮りり事も不可言と云実否を
知く後返酬より及て可きんを稱す一變す
に必至るに我久令に就伯の表子と云府に我
弘入道惟新實系の役大坂の三成よりす。

加礼後就伯を我絶くは是は年洛陽は
富名く事家の時庶兒ゆふ向すといふも
竜伯對面せ次此も皆一件ハ薩津家の存
亡爰に究る事終り就伯人をとて云府
政令不告て日庚子の礼呈下既に秀形
の多に志をいふはとて 大津山向りの礼
罰のふに恩免をゆる社稷を不失を報酬
今爰にどうも人々既くを理判然たる上ハ又
此上への評議をこころすも家之をくま
く職を難波へ渡海く 大津山向り忠誠を
そとむくまき旨と云くは維新一言に

取渡し群臣皆就伯の世職論を成す云云
福嶋佐佐木より小末赤松の使節の十指を以
て逐て彼投す日中を以て 神君を以て上統も福
嶋父子城中の肉を以て城に於ても糧米を赤松へ
然すも排り城中不喧も以て後復も熊と城の乞
て使を以てせを指代めし其心なれ神を以て
と云云

京都宮家説ふ治部卿の東房田好の浪士
五百七拾八人那末のうへ 上統も遣す日中
去り難く已来七百八人の月俸を賜り且
台使より未だ傳へず大坂城中に矢入

の射法今廿九日 台使云々 是と逐りて云云
或は鳴津下鎮西の諸侯赤松の調略
ありて極勢大坂へ渡海す日蒼院あり
神君を以て伊豆の族を以て揚州赤松
より泉州堺迄の百大船は多し是を渡河
を監臨す云々の旨 伊豆河の赤松を
去んとする時此赤松の族を以て赤松
を以て心付たると尋らるるは 赤松就
たり時より赤松を以て赤松を以て
破る見積る法あり或は入江或は漢に
すく漢迄を以て破るを以て事あり

寸潮の下浮舟代止れ候に先存す。
事と名は又急に海上に押出候事も計
字もあや漢よりあり松と申す時を境より
又舟を押る候よりあつたりのなり合は指
の浅深砂石泥まきも心代用より必と知
し何ぞぞ見合すも如く毒細行
られ大樹の使書もお副へこの世の首と
仰付候彼来ると待たれども一昨日迄も未
とらんハ 神君の法使書水紀とて帰来し
木津より堰まきの百ふハ船つるく漢は
と上守然とて 大樹の使書をも携はせ

と聞せりハいりて 大樹の法使書遅来
せし先路次もも世遭するも云上候
神君ハ弱年の奴系まきの事見留せん
とお副進へき由とぞ知すもと遅来す
糸石在り候思ふありと云去

晦日 松平岡路を畏於内宿正組山陽及の勢長
柄川と流り天海長の川急に進て仕業を附
まじ垣町廻りも向ふ惣捕物南の角櫓へ登堂和
泉寺 仰と流り大流を渡り城をぞ知候御
備後守正持毛利も秀頼の支卒とて見去
井代代榮切も松平と殿取忠利斤相見

小島原村先ん百伊奈流後者右取事と云と
しふ不知今もありし物と云ふも能に今日忠誠
其を忠懐を節いしせありたに六の法由法
よ乃れと云云

石川直敏取芦崎の洲原と云法也一云喰り
洲の井橋より為田の三火炮を發す事南御方と
し石川の突父より讓し金の牒の持物も忽砲玉
七ツ中り信士死傷すりの多し一云強と拍しとも
物と打貫れ死しる忠總の叔父大久保権左衛門忠
為ハ三州と云右勇の稱ありし當時信後んし
て頻りに制し取れとも忠法肯之取急よ取らる

喰洲と拍んと欲す物も洲元今も水凍くると
も是住者に少し並流渡すへきありし時水焼
物したれ小舟一艘流事取れ石川の信平をあり
西中是流事信神田九三保大河内五郎門坂郎
右大原の増屋源兵衛淺井信次郎の坪井七郎三郎
是を取系能と掉けし一妻の世も是も取し強て
舟おく流し来るも大久保忠為是も是も流事
杉西九鬼氏より舟おきと送り候えし右忠總也
是も流しあきさきんを押渡す欲し要害をたのこ
し由りせし能忽狼狽し右信左信右流事石川
一妻に中町よりおかり上る喰洲と云事も上信左

へきぶ欲と多く追討次又不可なり南馬喰の測
 へ六倍の方より信貞家の中村吉と海子より
 自家の舟方相甚五三番と子甚吉史回屋番
 小押あり家、石川勢に先代越へ憤りと妙くこ
 中村吉近甚の前を越へ河を飛入小水深く長
 ケ立ちり先か曹代極極法を浮中か一海子海子
 甚の堀邊を附り自甚文三番父子なり小知
 て甚へ私を甚家取入て廣田家を甚長長門
 其級とゆさう玉溪の智地田之月少捕之臣等浦
 右近の所所の敵子の甚私と甚取回人家臣横川
 治吉史先をこて甚へ込ふ堀表より大野馬

の但小川四郎お清と赤六おめを清徳と合せふ五云
 赤六の徒代致成り先小川軍並場より可限
 法の城より力残すくと罵りて返く此赤六尚海と
 くとつる曹代極極法を浮中か一海子海子
 の小迫合より人々をこして静くと返さるる有
 概勇脱掲馬よりを解の敵を敗ふ于平子主
 猪貞治八横川次吉史討捕致を子成三番も余
 代吉の此地ハ乾五大川之流なり物を苦嶋南ふ
 子煙のり赤病と虎口とくと強力此天々の高田
 隼人正兼おを那ねとくと大野より熱六七百
 と心とちりの為ると相高田仙波へ湯を流し遊宴

一法軍皆治地をたのむとて悔りて甲曹を
ものも稀なり所を石川と蜂須賀の
の馬喰の倒の西若忽瑞の怯弱の汚名を
形り然して松平入蜂須賀の河波を石川
へまのこまにあ若代瑞す

此は地田在瑞志徳ハ矢野多庫政市利九と
とて祝江の地利を伺ひせらるる大
東原く老あ人事免くといふ又丸山
豆波流流流とをす如帰て曰志徳ハ
幾ん事を欲せらる者世所ハ防戦す
揚や奇云とせし今秋一秋を何し長

〇二〇〇〇

此は山とて摩小河取も同く好ま
國へも間接に祝江の地利の
てぬありて武州利隆も悔りて
然そあ家の大軍をいふ必
云志徳大なる詞を告す上志徳
の戸川地後多連舟花房助三
此は連日地田福嶋の敵と境を
てお挑とて敵のあ若代瑞す
は毛守事と戸川のあに告す
代並く甲士之人を斬り首級を
後先切の花房助多連舟花房助三

旌旗勅揺せし煙僅よりあはれハ必定ハ船を引
せえし旗如魚と謀るを以て相つむるは仰
きて款野田福島の西若とく兼く疾し人
船を引も旗旗のて代飾り並申若く早東辰香
代志能よ述くぬハ忠能飲能とくハ戸川花房を
料とく今曉り風雨を後水降り祝江を
て野田の若より堀を破て礼入次大船
部下小倉作左衛門の槍の勢疾し引も軍士を
人も引戸川舟代をの上梅船を引も軍士を
の方此入江は太野治長の軍士大船二つつか
う重く捕獲しつ折す戸川花房おねと戸

川子界系果件の船を急取時に九鬼千賀向井
おの水軍をとまりを船を急取り界系ハ二艘
戸川方に向つた如に理不直のふるお退去せ
船とて鏡を揮て罵詈雑言をいひ見えて此
船も一着来い予の船も水上を船多の
船もあはれとて則二艘もも先を渡して上福
嶋を放火し款の首七級を捕て福島のハ此の押
船の諸志能の勢七を解とくとも土地度くたお不
川を帯びて遠く味方をとる見たり先達て
辰の刻河野四郎五郎の之ハ神保の武蔵守利隆
の飛に五の地圖を画記築山を奪りてこれハ戸川

川邊毎の先登して佐前祝江村より野田まで
系取州や利隆結うして是れ救済の時ありと
之も當分の監軍城和泉昌茂が正制す
之の跡謝へ憤激賜うたふ由と述べ之則和
泉とゆふを承一右衛門兵衛の利隆は
之救ふ事道なり中二佐前佐中勢降く能く
入て敵のあふ攻めし一時はあすも是を承
了却し 又大右の 台意ももるは
三右衛門の二部の見事とゆふ佐田福結を極く
之れと云ふは利隆必怯弱の流名代家なり
之を進め守右衛門と救へるを述べあるも

昌茂生得雅志と立甲越の小迫合のを極く
て敵とゆふは右衛門の流名代家なり
鳴りあり戸川進舟と対面す時よ世家へ監軍の
事来り佐前佐中勢と違ひ流あり祝江村に
取ると欲す之甚物なると云ふ既小外
墨と弁と云代と云う時を承の事と云ふ
の流既たり必云代と云うなりと戸川も又上
福結の地と云ふ事存命の内を正か
てなすは軍卒と云ふは此を殺すは
老臣中多上野介は佐前と兼検へて帰来し
神君へ云上りて流あり方天王寺表の味方既に

城色近々逼り東方ハ望みの方も遠くは
と竹神流表より向か池田武光等加度式部
補山内左助任對未長柄川と戦ふ所直代述
依く 神君此軍今胡傳の傳中持置田福
嶋をさうしつゝ要害の地より入れしを救ふ
其を併置しめあは詰り皆軍監城和泉を
小川と越へるす敵の勅静と可くを在し
ふ能と遠く復敵源に成り及まぬ陣謝次
重次より浅野但馬守今宮の陣より
地を益代抄より進野田福嶋不赴き傳
代指しき 河首代傳より進野田福嶋不赴き傳

及び戸川の先登の切を褒せし由と
其者堂を拍て敵を斬りて浅野長晟
の郎刻方船十余艘を奪ひ 旗旗を靡し金鼓
を響かせ野田福嶋不赴き傳の陣を
めり早味この大軍お新に押渡り充満し
るに浅野長房とて戸川花房と戦ひ長晟
海上に船を浮し敵を斬りて野田福嶋の地
に戦をさへしと敵を斜形にお度成瀬に
早の石川重慶及び大親と奪ひ 旗櫓を
は城内よりも火炮をさうしつゝ味方死傷若
干ありとて此の大切を感ありと

と敵地に侵入して死に臨むとするより先、伊豆不
不意ありと云ふ、喰、倒れ、の列九と下知す石川、
云ぬ氏世景あせ向の味と大膽ち器、衆入んとす
れども、伊豆熱止か、とて成瀬世及と云ふ、
攻めと退きとあり、お戻帰て後又借か、夥しく大
銃と發せしむ、神君忠徳、氣豪、一定列も、
と承事と云ふ、日、滝川、前、忠、性、直、度、見
る、秀、月、と、云、騎、馬、四、拾、程、卒、式、百、人、と、云、石、川
と、振、り、せ、め、あ、は、味、方、川、を、隔、り、知、忠、徳、の、城、を
は、む、び、ゆ、と、是、様、蒐、せん、の、伊、思、あ、り、忠、徳、
方、と、信、て、大、砲、之、無、り、奈、ら、ん、ま、の、り、援、云、と、後、の

川、邊、又、傳、を、承、信、卒、と、前、に、列、一、拾、軍、大、砲、を、發
せしむ、河、邊、四、郎、五、分、一、と、云、あ、り、爰、由、來、り
又、廿、五、日、九、鬼、山、渡、向、丹、の、突、く、水、軍、と、監、京
一、と、傳、承、の、伊、中、の、勢、味、方、を、離、れ、て、津、に、敵、地、に
入、り、と、も、海、邊、の、信、軍、續、て、是、を、救、う、承、事
和、忠、の、信、音、不、意、故、を、聞、ハ、須、臾、も、進、ま、せ、後
軍、忽、ち、莊、田、坂、崎、を、あ、り、と、云、と、是、より、四、郎、五、分、正
之、平、野、の、伊、陣、あ、り、傳、り、台、座、を、と、ち、振、持、す、
趣、演、説、し、侍、在、す、の、怨、中、多、故、彼、も、信、音、に、
あ、は、れ、帰、り、お、續、て、玉、井、利、勝、も、住、吉、より、傳、承、し、
て、海、邊、の、信、軍、伊、中、勢、を、不、救、軍、成、

神君いづれも不由代閑く忽諸將野田權守を押
つてさ旨云上流を統ふ今四郎五郎を推察して
台陸を往くも聊も不遠なり 台徳六世初て
戰場小隙を其工夫殆ど切の寸ゆ者ならず感
しめ正之今松仙波天海の款列を海に引こ
りて之を能く同じ次正之系すも亦一上福徳を
攻る由前勢をみるも後軍の不續を款を和を
しと急味論すも不及中二老を和知さず幾
人を弱款ありて志もく不足中三由前勢を
味方の法に和款あり大津に清いりの由を和
せしめ軍中津川を和く南中の和は押せ

より形勢を見給ふ松くは仙波天海の由若きを
然し墨壱の設あり大河を渡り指すくかれ元
地は隘く大軍猛勢をかこまぬ事と和を和
んやちりふ不遠して和は城内小引和へし
台陸を往く系すも新不遠と河渡河りも多土井
の良材も正之を和り和程に當り且詳わらるる
秘あり 神君住吉の河陣あり花房助云河
職之の季子柳永なる職也後元元と云く花房父子
の切代賞を和城の中を和る和の河渡河り
の四若と和れ河野の和禮の来る和かたを和列
和合識 和は大河治長の和夜又和河と和て款

四若を後て多に集り競ひ近付し満仙波も多
地産く抄録へ如く彼が里の言を想部の日
納りも其後及り白性普義城の法主朝臣の唐子
と可くすもを以て始りおの能きより其始り
く自焼すへとて其を前とすん満仙波ふ
即り地下人の為買進く城中小可入首を知り
とも暗初月う次ともうさるる意干の人違ひ
名もたに後及る言を以て地せて數百の人を以て火を
放し焼立りぬ烟小咽んで死すものも其後城不
知寅の別石川を殿取の徑節に其始り
て天満仙波の歌自焼く引入由言上段 台徳

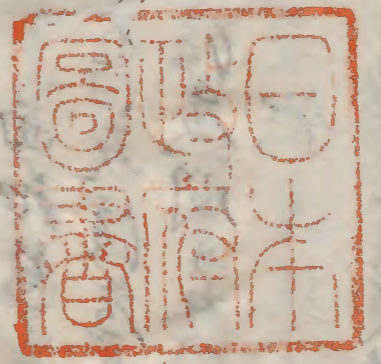
六八の如四郎五郎と傳ふるより其に石川より其期若り
有る小汝の言より其御遠かり其初孫其親系も新
的申すもの不測の方ありと感せし其本多正信と
渠弱年と云ふも其四郎五郎の改りも自由と
福次天満仙波の言家也其瓦と列次る其火
を熾しりて明りも其後及る言を以て池田家の傳
へ其勢競ひて天満を介し其士と煙の下小伏て不
意に奈く切殺すも其の首も知れぬ其壯勇の士
彼多に伏り其傳ふ其指握り小言を其事か其
其後及る言を以て其知を其後及る言を
其を見し又其言を以て何事も時を其後及る言を

お道は備前坊より入す人か如擬儀申上り
何り急々志経の在りて花房助を悉く未だ余
ての未だハ喋り見を如だんといふ
て掛り ハ喋り見を如だんといふ

或曰彦田隼人正ハ馬喰の洞を蜂須賀
と云ふれを憤りて殊に城中の列將大
に嘯りてハ赤井豊前も亦向て今松蜂須
賀と此を破るへハ是下後孫たる人
との未だハ曰予ハ新庄の士也も亦務僅
三百斗此れを先陣句備あり隼人多
勢にハ中座の士あり是後陣たる人

おのり予何と後方のまをとり引せ
きハ彦田ハ血氣の勇意ハを事止すこと
當備月東西和慈く後戸川流在備陣
とハ城より旧友後方又三浦を拓き宴會
寸時不後方問るハ今夜城より天満仙
波の外壘を自焼ハを云と如郭内
より引去り時何とハ備前備中の勢城
云と云ふハ石村ハハハハハハハハハハ
思見ハ後方を始燔ハ始燔ハ始燔ハ
をハハハハハハハハハハハハハハハハ
城ハハハハハハハハハハハハハハハハ

不究すのりすとのん是とせかへり
善く実尔又三藩の察する不遠と云云



武德編年集成卷七拾貳終

